

## ウズベキスタンにて「日本ー中央アジア 文化・観光交流促進シンポジウム」開催

(財) アジア太平洋観光交流センターは、3月19日(土)と20日(日)の2日間にかけて、世界観光機関(WTO)、国土交通省、および対外経済関係庁(ウズベキスタン共和国)、ウズベクツーリズム(同国)との共催のもと、ウズベキスタンの首都タシケント(会場: ホテルインターコンチネンタル)にて「日本ー中央アジア 文化・観光交流促進シンポジウム」を開催した。日本からの参加者約110名、在ウズベキスタン邦人約30名、ウズベキスタンより約160名、中央アジア周辺諸国より約10名、そのほか国際機関等からの参加者を入れて合計約330名の参加があり、シンポジウムは会期両日とも盛会のうちに終了した。また、シンポジウム2日目には、昼食休憩の時間を利用した「旅行商談会」も別会場にて行われ、日本の旅行会社とのビジネスチャンスを狙って、ウズベキスタンおよび中央アジア諸国の旅行業界から多数の参加があり、商談会会場は熱気に包まれた。

このシンポジウムは、国際連合の専門機関であるWTOが進めている「観光開発を通じた貧困軽減(ST-EP: Sustainable Tourism – Eliminating Poverty) プロジェクト」の考え方にに基づき、当財団が国土交通省と協力して企画したもの。世界有数の海外旅行大国である日本から開発途上国への観光客が増加すれば、観光収入による外貨獲得を通じて経済発展に結びつくとともに、ホテル、レストラン、土産物販売等を通じて草の根レベルにも直接収入が入ることから、貧困の軽減に大きく資する。16年度は、シルクロードの中継地として、あるいは第二次世界大戦後の日本人抑留者達の存在等日本との歴史的関係が深く、WTOの主要な観光開発プロジェクトの一つである「シルクロード・プロジェクト」のメインの対象地域である中央アジアのウズベキスタンで事業を行うこととなった。タシケントには成田、関空から直行便(ウズベキスタン航空)が飛んでおり、今後の日本人の重要なデスティネーション(目的地)となる可能性を有していると考えられる。

会議1日目の3月19日(土)には開会式が行なわれた。ウズベクツーリズムのフサンバエフ総裁がモデレーターを務め、ウズベキスタン共和国対外経済関係庁のナスレジン・ナジモフ長官からの主催者挨拶から始まり、続いて同じく主催者として洞駿国土交通審議官より挨拶があり、さらに、WTO欧州代表部のルイジ・カブリーニ代表による主催者挨拶があった。続いてご来賓挨拶として、日本からの参加者を代表された荒井正吾参議院議員よりご挨拶を頂き、最後に同じくご来賓の楠本祐一在ウズベキスタン日本国特命全権大使よりご挨拶を頂いて開会式を終了した。

開会式の後、シンポジウムが開始された。まず、基調講演として「シルクロードと日本」と題し、シルクロード学研究センターの樋口隆康所長より講演があった。東洋と西洋の文化交流であるシルクロードについて説明がなされ、シルクロードに残る文化財およびその

保存の重要性を説いた。また、今回のシンポジウムにちなみ、ウズベキスタンの文化遺産にも詳しく触れた。次に、UNESCO タシケント事務所のマイケル・バリー・レーン所長より「ウズベキスタンの文化観光」と題し、講演があった。ウズベキスタンの世界遺産のみならず、同国の色鮮やかな民族衣装や生活様式、スザニ（伝統的な刺繍が施された布）、青色を基調とした伝統陶磁器や伝統音楽など同国の無形文化財も紹介。また、同機関による絨毯織りの再興の試みも説明した。続いて、WTO 欧州代表部のレイジ・カブリーニ代表より「WTO シルクロード・プロジェクトと中央アジア観光」と題し、講演があった。WTO がこれまで行ってきたシルクロード事業活動を紹介。また、日本人の中央アジア地域の観光における重要性を強調。今後もシルクロード関係諸国の発展に寄与する観光促進を目指し、UNDP（国連開発計画）と連携した同機関の事業推進を発表した。

次に、(社)日本旅行業協会の金子賢太郎理事長より「日本のツーリズムとウズベキスタン観光振興の提案」と題し、講演があった。観光立国を目指す日本とその目標、また、日本人はシルクロードが大好きであると紹介。そして、ウズベキスタンへの日本人観光客増加のための施策を提案した。続いて、ウズベクツーリズムのフサンバエフ総裁より「ウズベキスタン観光事情」と題し、講演があった。自国には 400 以上の旅行会社があるが、観光分野のさらなるウズベク人専門家育成の重要性を語った。メディアを利用した観光 PR や JATA 主催の活動行事を活用していくと述べ、また、シルクロード関係中央アジア諸国と中国を合わせたパッケージツアーは有効だと語った。次に、1 日目の最後として、ウズベキスタン航空のヴァレリー・チャン総裁より「ウズベキスタン航空事情」と題し、講演があった。自国には 5 つの国際空港があり、現在日本とは関西国際空港、成田空港と同国を結んでいるが、需要があれば日本の地方都市への就航も検討すると述べた。本年、ブハラ、サマルカンド、ヒバとタシケントを結ぶ周遊フライトを実現予定であると紹介し、自社として自国の発展に重要な観光振興に必要な全ての要望に応じていく用意があると語った。

1 日目の夜には、日本政府とウズベキスタン政府の共催による歓迎レセプションが行われた。ウズベクツーリズムのフサンバエフ総裁、および洞駿国土交通審議官による主催者挨拶に続き、当財団の本田勇一郎理事長による乾杯挨拶でレセプションがスタート。日本とウズベキスタンからの多数の参加者で会場は大いに賑わい、通訳を交えて活発に交流を深める参加者の姿があちこちで見受けられた。また、会場にはウズベキスタン政府の計らいで民族舞踊と民族楽団が入り、場を盛り上げていた。

2 日目は、日本の経済界からの参加者を代表された西日本旅客鉄道(株)の南谷昌二郎代表取締役会長と関西国際空港(株)の村山敦代表取締役社長からのご来賓挨拶にて幕を開けた。そして講演に移り、最初に「ウズベキスタンへの経済投資の潜在能力」と題し、ウズベキスタン共和国対外経済関係庁のシャフロ・アブドラエフ次官より講演があった。自国の経済政策、貿易、天然資源や農産物など経済情勢について説明した。また、観光分野では年間

150 万人まで観光客を増加させる潜在能力があると語った。続いて、「文化歴史史跡の保存活動」と題し、ウズベキスタン共和国文化スポーツ省文化遺産保護局のアブデュソフィ・ラフマノフ副部長より講演があった。中央アジア諸国の中で最も多く UNESCO 世界遺産にも登録された文化遺産を有する自国でのその保存活動を紹介。続いて、「ウズベキスタンー日本間の文化交流」について、まず、ウズベキスタン側より「NORIKO 学級と陶芸」と題し、リシタン・ジャパン文化経済交流センターのガニシエル・ナジロフ所長より講演があった。エンジニアとして同国に赴任した大崎重勝氏により、キルギスとの国境沿いに位置する小さな町、リシタンで 1999 年に創められた日本語学校「NORIKO 学級」の歴史を紹介（「NORIKO」は大崎氏夫人のお名前）。そして、2001 年大崎夫妻が帰国後、リシタン・ジャパンセンターが学校を引き継いだ現在の活動状況を説明後、子供達が見事な日本語による落語や歌などを披露した。次に、ウズベキスタン職人協会リシタン支部のアリシエル・ナジロフ支部長より伝統陶芸「リシタン」について講演があった。中央アジア諸国で貴重な水をイメージした青色を基調とした細かい紋様が魅力的なリシタンを映像で紹介。会場付近ではリシタンの展示も行われ、その美しさに多くの参加者が魅了されていた。続いて、日本側より「サマルカンドでの取り組み」と題し、サマルカンド国立外国語大学日本語教師の山本雅宣先生より講演があった。日本語教育と観光とのつながり、観光学の授業開講の意義、観光業における人材育成などについて説明。サマルカンドに日本語と英語による旅行案内所を開設、さらに、英文のサマルカンド・ガイドブックを作成中であると紹介。ガイド養成は、自国に対する愛着が増すことで、その国・地域の発展にも寄与すると説いた。続いて、中央アジア諸国の観光事情紹介として、カザフスタン政府を代表して同国産業商工省商工観光活動規制委員会のトュゲルバイ・ベクベルゲノフ部長と、タジキスタン政府を代表して株式会社イン・ツーリスト タジキスタンのナビ・グルマトフ社長よりカントリープレゼンテーションが行われた。シンポジウム最後の講演として、「WTO シルクロード事務所の目標」と題し、WTO シルクロード事務所のウルグベック・アザモフ所長より事務所の紹介があり、昨日から 2 日間に渡り開催したシンポジウムの総括を WTO 欧州代表部のルイジ・カブリーニ代表が行って、プログラムを終了した。

午後からは、引き続き観光ワークショップを開催した。まず、「日本の観光振興政策」と題し、(独) 国際観光振興機構 (JNTO) の新井倭一理事より講演があった。日本の国際観光振興政策の沿革と、現在行われている「ビジット・ジャパン・キャンペーン」、JNTO の成り立ちと活動を紹介。そして主にウズベキスタンによる日本への観光イメージの売り込み方について提案を述べた。続いて、「中央アジア観光の課題」と題し、(株)日本旅行の鈴木勝雄常務取締役より講演があった。中央アジアは日本人にとって「空白のシルクロード」とし、中国西域とトルコによる観光客誘致活動に押されている中央アジアの PR 不足を指摘。また、日本人にとっての観光目的地の必須 3 要素とターゲットとなる日本人顧客層を説明した。続いて、グランド・ツーリズム・サービス社のアイディン・トゥリヤガノヴァ副社長より講演があった。シルクロードの十字路にある歴史深いウズベキスタンの観光目的地

としての魅力と観光インフラの現状を説明した。最後に、観光ワークショップに参加された旅行会社各社により、今後のウズベキスタン観光発展に役立つ提言と課題が述べられた。

2日間のシンポジウムが終了した翌日の21日（月）からは、サマルカンドとブハラ、そしてタシケントでのスタディツアーが日本旅行主催にて実施された。ちょうど3月21日は、ウズベキスタンの春分（ナブルーズ）にあたり、サマルカンド郊外の草原では遊牧民の風習を残すブスカシ（馬追い）が催され、観戦に訪れた多くの地元住民の方々と日本からのツアー参加者の方々との温かい交流があった。サマルカンド市内では3つのメドレセが一望できるレギスタン広場やティムール一族が眠るグリ・アミール廟など、ブハラではシンボル塔であるカラーン・ミナレット、大通りの交差点を丸屋根で覆ったバザールのタキ、歴代ブハラ・ハーンの居城であったアルク城などを周った。タシケントではウズベキスタン工芸博物館、ナヴォイ・オペラ・バレエ劇場、日本人墓地などを周った。